

2020年度

研究調査プロジェクト報告

ここでは、(公財)国際交通安全学会 (IATSS) が2020年度に実施した研究調査プロジェクトのうち、11本について概要を報告します。

凡例

プロジェクト番号

プロジェクト名

プロジェクトの概要

◎:プロジェクトリーダー

*:特別研究員

** :共同研究者、研究協力者、オブザーバー

(所属は当時)

自主研究プロジェクト: 2003A

ウォークابل・シティ評価手法の開発

日本では急激な人口減少、超高齢化を迎え、都市のコンパクト化が進められている。しかし、ただ単に都市をコンパクトにすれば良いわけではなく、都市の活力を維持し、魅力を向上させるために「居心地が良く歩きたくなるまちなか」から始まる都市再生が、2019年に国土交通省に設置された懇談会で提唱され、2020年度から「まちなかウォークابل推進プログラム」がスタートすることになった。既に、全国で302 (2021年1月末現在) の都市がウォークابل推進都市として名乗りを上げている。本研究は、ウォークابلな都市 (ウォークابل・シティ) を横断的に評価する手法を明らかにすることを目的とする。欧米の先進事例を参考にしつつ、日本の都市に適した評価手法を目指す。

◎一ノ瀬友博 (IATSS 会員/慶應義塾大学)
 森本章倫 (IATSS 会員/早稲田大学)
 馬奈木俊介 (IATSS 会員/九州大学)
 村上暁信* (筑波大学)
 田島夏与* (立教大学)
 柴山多佳児* (Technische Universität Wien)
 紀伊雅敦* (香川大学)
 小嶋 文* (埼玉大学)
 長田哲平* (宇都宮大学)
 鳥海 梓* (東京大学)

広場・歩行空間における群衆行動の観測とその制御による安全性向上に関する研究

人口密度が高く、狭隘道路の多いアジア的大都市において、広場・歩道空間の歩行者群集による混雑は避けられない問題となっている。特に大規模イベント開催地周辺、また、公共交通結節点（鉄道駅等）周辺の道路では混雑が多発する。これら混雑は、歩行者の安全・快適、周辺交通への影響、犯罪発生などに関わる。

これまで過去の経験に基づいた対策などが行われてきているが、モバイル通信の発達やこれに基づいた群集状態の把握・誘導、さらには、これらに基づいた空間設計に関する知見はあまり得られていない。本研究では、3年間を通じて、国内外の専門家を交えて、広場・歩行空間における群衆行動の観測と制御に関わる最新の知見とともに、これらを交通

流の制御や警備活動、空間設計に活かす方策の検討を目的とする。

本研究では、1年目の研究レビュー、事例収集により、国内渋谷ハロウィン、神戸ルミナリエでの観測調査とモバイルデータとの比較、2年目のモバイルデータに基づいた歩行者状態の解析、国際ハッカソンイベントを通じた群集と犯罪の関連分析、画像解析事例のレビューを行った。

特にモバイルデータの活用により、群集および混雑状態を把握できる可能性が示されたことから、今後は、オリンピックなどの大規模イベント時や災害対応時の歩行空間のあり方について、海外の関係する研究者との共同研究会等の開催を通じて、群集状態の緩和策について、新たな知見を提供したい。

◎吉田長裕 (IATSS 会員/大阪市立大学)
 上條俊介 (IATSS 会員/東京大学)
 北村友人 (IATSS 会員/東京大学)
 小竹元基 (IATSS 会員/東京大学)
 中村彰宏 (IATSS 会員/中央大学)
 平岡敏洋 (IATSS 会員/東京大学)
 瀧澤重志* (大阪市立大学)
 加登 遼* (大阪市立大学)
 藤山 拓* (University College London)
 山口敬太* (京都大学)
 松下光範* (関西大学)

松村真宏* (大阪大学)
 木村貴彦* (関西福祉科学大学)
 塩見康博* (立命館大学)
 紀ノ定保礼* (静岡理科大学)
 葉 健人* (大阪大学)
 椎名啓雄* (警視庁)
 海老澤綾一* (警視庁)
 Marjan Hagenzieker* (Delft University of Technology)
 Reka Solymosi* (The University of Manchester)
 石附 弘** (IATSS 評議員)

都市の文化的創造的機能を支える公共交通の役割

未来の都市のあり方を考えるに当たり、都市はサステナブルかつクリエイティブであるべきで、文化的かつ創造的な機能・活動の集積の重要性は大きい。派生する交通需要の受け皿、かつそれらを誘引・誘導する仕掛けとしての公共交通の役割を明らかにすることを目的とする。過去2年の成果を基に、最終(2020)年度は、大都市東京、地方都市富山でのケーススタディを実施し、公共交通のあり方について提言を行う予定で活動を開始した。

東京都区部での空間構成上の課題検討、コロナ禍での文化的創造的機能が受けた影響分析、現地研究者、現地行政担当者、在住市民を交えた2回にわたるワークショップを経て、以下の結論を得た。通勤通学一辺倒の都市から、文化的創造的機能中心への変革、そこに伴う余暇と余韻の再発見、移動の価値合理的へのシフト、そこでの公共交通の重要性、わくわくと余韻の空間設計および運賃や端末輸送の工夫、車両や施設設計再考を提案した。コロナ禍でのニューノーマルの流れを受けてNEW LOCALの育成を視野に、濃密なコンタクトの意味の再確認からの文化的創造的活動の重要性、公共交通危機回避および自動車過度依存抑制を踏まえた文化的創造的活動を支える公共交通への転換、そして、東京だけでなく、地方都市が主役となるべきことを提言した。

◎中村文彦	(IATSS 会員／横浜国立大学)
斎藤 誠	(IATSS 会員／東京大学)
土井健司	(IATSS 会員／大阪大学)
藤井 聡	(IATSS 会員／京都大学)
馬奈木俊介	(IATSS 会員／九州大学)
吉田長裕	(IATSS 会員／大阪市立大学)
白石真澄*	(IATSS 顧問／関西大学)
橋本鋼太郎*	(IATSS 顧問／(一財)首都高速道路技術センター)
松村みち子*	(IATSS 顧問／タウンクリエイター)
生島 翔*	((株)生島企画室)
猪井博登*	(富山大学)
川端祐一郎*	(京都大学)
紀伊雅敦*	(香川大学)
後藤孝夫*	(中央大学)
出口 敦*	(東京大学)
中野 卓*	((国研)建築研究所)
三浦詩乃*	(東京大学)
吉見俊哉*	(東京大学)

児童生徒等に対する効果的な交通安全教育を普及させるために何が必要か ～教育普及スキームの構築研究～

本研究の目的は、児童生徒等に対する発達段階に応じた効果的な交通安全教育を普及させるための要件を明確にして、教育普及のためのスキームを構築することである。2018-2020年度の3年間の研究調査から、児童生徒主体の交通安全教育活動は、子どもたちの興味関心を引き出し、意識・行動変容を導く可能性が高いことが見いだされた。特に2020年度は、生徒会が主催する交通安全シンポジウムの開催、交通安全推進委員会による交通安全新聞の発行、生徒会同士のWEB会議による他校との情報交換など、高校生による主体的な活動を推進した。その結果、こうした活動が生徒の自我関与の意識を高め、教育効果のヨコへの広がり(例えば、部活動を通して全校生徒が関わる活動)と、タテへの広がり(例えば、新入生に向けての交通安全動画の作成)を導く可能性が示唆された。児童生徒主体の活動がより一層社会に普及することを目指し、主体的な活動を奨励する褒賞助成制度の活用や、指導案・教材の作成等の支援サービスの提供という観点から、一連の研究成果を総括し、今後の課題を議論した。

◎小川和久	(IATSS 会員／東北工業大学)
岡村和子	(IATSS 会員／科学警察研究所)
北村友人	(IATSS 会員／東京大学)
鈴木弘司	(IATSS 会員／名古屋工業大学)
松村みちこ*	(IATSS 顧問／タウンクリエイター)
奥山祐輔*	(黒井産業(株))
加藤麻樹*	(早稲田大学)
神田直弥*	(東北公益文科大学)
菊池 輝*	(東北工業大学)
中井 宏*	(大阪大学)
名古屋武一*	((株)ムジコ・クリエイト)
平田大輔*	((株)ムジコ・クリエイト)
森本晋也*	(文部科学省)
吉門直子*	(高知県教育委員会)
足立国大**	(名古屋工業大学)
荻谷英祐**	(名古屋工業大学)
中原かゆき**	(東京大学)

自動運転の時代と交通体系：人間、AI、交通社会

2020年4月の道路交通法改正により、自動運転のレベル3の公道利用が可能になった。レベル3は、テークオーバー前のレベル4以上の状態とテークオーバー後のレベル2以下の状態との混合体であるから、レベル3の利用については、レベル4以上の運行にかかる問題点を検討しつつ、レベル2以下の技術の成熟化も確認する必要がある。

レベル4以上の運行の安全性については、運転者の概念と、ジレンマ状況に対する解決策を検討した。運転者の概念は、ウィーン条約が改正され、それが日本も加盟するジュネーブ条約の解釈に影響を及ぼすことで、レベル4の国内法による実現も可能になりつつある状況を確認した。

ジレンマ状況については、トローリー問題の検討を行った。トローリー問題を惹起しうる自動運転車を受容するかに係る潜在的意識を検討した。この問題は、国際的協調の下で解決されるべきことから国際シンポジウムを開催し、英独仏の専門家との議論の場を持った。世界の法制度立案を牽引するリーダーたちとの間で意見交換がなされ、有意義であった（参加者約90名）。

レベル2以下の技術の成熟化は、レベル3の利用促進策の中で検討されることが多く、北海道庁による取り組みを検討した。道庁の取り組みは、先進的なものであり、今度とも、協力関係の下、その現実化に貢献したい。

◎今井猛嘉	(IATSS 会員／法政大学)	鶴賀孝廣*	(IATSS 顧問)
岩貞るみこ	(IATSS 会員／モータージャーナリスト)	長谷川孝明*	(IATSS 顧問／埼玉大学)
大口 敬	(IATSS 会員／東京大学)	福田 敦*	(IATSS 顧問／日本大学)
太田和博	(IATSS 会員／専修大学)	松村良之*	(IATSS 顧問／北海道大学)
岡村和子	(IATSS 会員／科学警察研究所)	矢野雅文*	(IATSS 顧問／東北大学)
上條俊介	(IATSS 会員／東京大学)	横山利夫*	(IATSS 顧問／(株)本田技術研究所)
木林和彦	(IATSS 会員／東京女子医科大学)	佐藤昌之*	(ITS Japan)
篠原一光	(IATSS 会員／大阪大学)	清水和夫*	(国際モータージャーナリスト)
菅沼直樹	(IATSS 会員／金沢大学)	三浦清洋*	((公財)日本交通計画協会)
杉本洋一	(IATSS 会員／(株)本田技術研究所)	新倉 聡*	((公財)日本道路交通情報センター)
鈴木弘司	(IATSS 会員／名古屋工業大学)	宮木由貴子*	((株)第一生命経済研究所)
田久保宣晃	(IATSS 会員／科学警察研究所)	池田大介*	(東雲総合法律事務所)
土井健司	(IATSS 会員／大阪大学)	若月将史*	(第一東京弁護士会)
中尾田隆	(IATSS 会員／池袋南法律事務所)	大澤 彩*	(法政大学)
中村彰宏	(IATSS 会員／中央大学)	ルプルトン カロリース*	(法政大学)
浜岡秀勝	(IATSS 会員／秋田大学)	石附 弘**	(IATSS 評議員)
平岡敏洋	(IATSS 会員／東京大学)	諸隈繁浩**	(警察庁)
森本章倫	(IATSS 会員／早稲田大学)	畠山雅英**	(警察庁)
吉田長裕	(IATSS 会員／大阪市立大学)	計良直之**	(警察庁)
久保田尚*	(IATSS 理事／埼玉大学)	植木健司**	(経済産業省)
宮寄拓郎*	(IATSS 理事／NTT データアイ)	長谷川麗佳**	(経済産業省)
赤羽弘和*	(IATSS 顧問／千葉工業大学)		

日本のラウンドアバウトデータベースと事例集の整備

2009年度より、IATSSの研究調査プロジェクトで、ラウンドアバウトの実用展開に着手して以来、全国各地でラウンドアバウトが増加している。これらのラウンドアバウトにおいては、その構造や用途、交通条件などの面において、さまざまな特徴を有するものが出てきているものの、それらの実態は必ずしも十分明らかになっていない。本プロジェクトでは、信頼性の高いラウンドアバウトデータベースの整備を図り、事例集を編集することで、日本のラウンドアバウトの体系的整理を図ることを目的とする。これらにより、日本での実態評価が可能になるとともに、計画・整備の経緯や技術的検討に関わるアーカイヴとして、今後のラウンドアバウト整備に際して、行政上・実務上、貴重な情報を提供することができる。

2020年度は、全国100箇所以上のラウンドアバウトに関するデータベースの基礎を整備し、統計的分析により、日本のラウンドアバウトの特徴を定量的に把握することを可能とした。また、全国30箇所の代表的なラウンドアバウトについて、ヒアリング、Eメールによる管理者へのアンケート調査を実施し、導入経緯や課題、各種詳細データ、写真、ファイル等入手し、それらの特徴を整理し分析した。

◎中村英樹	(IATSS 会員/名古屋大学)
鈴木弘司	(IATSS 会員/名古屋工業大学)
浜岡秀勝	(IATSS 会員/秋田大学)
松村みち子*	(IATSS 顧問/タウンクリエイター)
阿部義典*	(国際航業(株))
井料美帆*	(名古屋大学)
奥城 洋*	(セントラルコンサルタント(株))
神戸信人*	((株)オリエンタルコンサルタンツ)
小林 寛*	(国土技術政策総合研究所)
下川澄雄*	(日本大学)
鋤柄 寛*	(飯田市)
高瀬達夫*	(信州大学)
高橋健一*	(三井共同建設コンサルタント(株))
張 馨*	(名古屋大学)
溝田景子*	((株)建設技術研究所)
宮坂好彦*	((株)建設技術研究所)
宗広一徳*	(寒地土木研究所)
吉岡慶祐*	(日本大学)
米山喜之*	((株)長大)
渡部数樹*	((株)オリエンタルコンサルタンツ)
康 楠**	(南京工業大学)
近藤益生**	(飯田市)
寺沢浩土**	(飯田市)

電動モビリティ混在下の安全快適な道路環境整備に関する研究

電動キックボード、座り乗りの超小型モビリティなど、さまざまな電動モビリティが開発され、安全快適な交通社会を実現するための次世代モビリティとしての普及が期待されている。しかし、わが国では新たなモビリティに対する受容性、既存モビリティとの混在により生じ得る歩道・車道上の安全性への問題、法的な整備や通行空間の議論など、検討すべき課題が山積する。

本研究では、国内外の調査により、上記モビリティをわが国に導入する際にクリアすべき障壁を明らかにする。また、各種電動モビリティ混在下の歩道、車道空間における利用者心理、挙動、他者とのコンフリクトを分析し、複数主体が安心して利用できる歩道および車道空間整備のあり方について検討する。

プロジェクト1年目として、電動モビリティの社会的受容性に関して、「ユーザーの捉え方」に着目した各種調査を実施した。その結果、「電動モビリティ購入時に重視するのは“安全性、利便性、レクリエーション性、周囲との調和”で、年齢が上がるほど安全性・利便性の機能を重視すること」、「電動キックボードの走行評価には、路面の段差振動が大きく影響し、乗車体験の有無も評価に影響すること」、「電動キックボードの保険制度や車両登録上に課題があること」、「電動モビリティはアトラクショナルな乗り物として期待される一方で、新たなモビリティとしての認知度を高める必要があること」という電動モビリティの持つ特性や期待感を明らかにし、現状の課題を確認した。

◎鈴木弘司	(IATSS 会員/名古屋工業大学)
小川和久	(IATSS 会員/東北工業大学)
小竹元基	(IATSS 会員/東京大学)
猪井博登*	(富山大学)
井料美帆*	(名古屋大学)
鈴木一史*	(群馬工業高等専門学校)
鈴木立人*	(University College London)
吉岡慶祐*	(日本大学)
Wael K. M. Alhajyaseen*	(Qatar University)
伊藤大貴**	(名古屋工業大学)

アジア地域における健康起因事故防止のための普及啓発活動の展開

健康障害が起因する重大な交通事故の増加を受けて、国土交通省は、健康起因事故対策検討委員会を設置する等、近年、健康起因事故防止は、交通事故対策の重要な課題として認識されている。我々は、超高齢社会で職業運転者の高齢化が進む中、さまざまな生活習慣病が健康起因事故の原因となり得ることから、無自覚な疾患も含めた健康起因事故への網羅的な対策が必要であると考え、これまでに職業運転者を対象とした実証的研究を行い、健康起因事故の系統的な対策が遅れていた睡眠時無呼吸症候群(SAS)や視野障害が交通事故増加のリスクとなることを報告してきた。また、2019年度には国内2カ所(東京都、愛媛県)において、本プロジェクトによる知見を紹介するシンポジウムを開催し、健康起因事故防止の普及啓発を行ってきた。以上により、本プロジェクトでは、これまでの研究で得られた知見をアジア地域において展開し、健康起因による交通事故削減に寄与することを目的とした。具体的には、本プロジェクトでは、①国際シンポジウムの開催と②普及啓発ツールの制作の2つの事業を行った。

◎谷川 武	(IATSS 会員/順天堂大学)
浅野水辺	(IATSS 会員/愛媛大学)
大口 敬	(IATSS 会員/東京大学)
太田和博	(IATSS 会員/専修大学)
岡村和子	(IATSS 会員/科学警察研究所)
小竹元基	(IATSS 会員/東京大学)
高橋正也	(IATSS 会員/労働安全衛生総合研究所)
国松志保*	(西葛西・井上眼科病院)
佐藤准子*	(順天堂大学)
白濱龍太郎*	(順天堂大学)
朱 沁暉*	(順天堂大学)
千葉伸太郎*	(東京慈恵会医科大学)
友岡清秀*	(順天堂大学)
ミヨー ニエン アング*	(順天堂大学)
和田裕雄*	(順天堂大学)
三好規子*	(愛媛県産業保健サービス(株))
福島史人*	(自治医科大学附属さいたま医療センター)
田島朋知**	(順天堂大学)
山戸健太郎**	(順天堂大学)
崎山紀子**	(東京医療保健大学)
大貫慧介**	(順天堂大学)
木村真奈美**	(順天堂大学)
安原幸生**	(国土交通省)
竹内康二**	(警察庁)
横田剛士**	(警察庁)
角 和晃**	(警察庁)

インドの小規模都市における地域に根ざした道路デザインの社会実装

本プロジェクトは、2019年度まで実施されてきたインドの小規模都市におけるSDGsターゲットを達成するために、現地行政と連携した街路デザインガイドラインの作成と道路交通状況の改善を実施してきた内容を、実際のインドの小都市で社会実装することを目的として実施された。そして、実際にインドのパンジャブ州パティアラ市において、交差点改良の実証実験を行った。その結果、先進国型のストリートデザイン導入を進めていくことだけでは、道路交通事故対策や適切な道路改良を行うことは難しいことが判明した。そのため、インドの小都市における道路改良の考え方や手順の理解、個別事象への対応、交通影響評価の方法、交通技術者の育成、改良事例の蓄積などを行っていく必要があることが明らかになった。

◎小早川悟	(IATSS 会員/日本大学)
上條俊介	(IATSS 会員/東京大学)
北村友人	(IATSS 会員/東京大学)
土井健司	(IATSS 会員/大阪大学)
吉田長裕	(IATSS 会員/大阪市立大学)
福田 敦*	(IATSS 顧問/日本大学)
菊池浩紀*	(日本大学)
木村貴彦*	(関西福祉科学大学)
Dinesh Mohan*	(IITD)
Geetam Tiwari*	(IITD)
Girish Agrawal*	(Jindal Global University)
Kumar Neeraj Jha*	(IITD)

二輪車文化を活かし安全を基本とした ASEAN 地域の持続可能な交通まちづくりの提案～メタデザインとして“Honda モデル”の普及に向けて～

本プロジェクトは、自動二輪が生活交通として定着している ASEAN 地域において、二輪車文化を活かしつつ、安全な利用を促進する持続可能な交通まちづくりのモデルを提案するものである。3 年にわたる取り組みの中で、1～2 年目においては、ASEAN 地域における自動二輪関連事故の原因に関する系統的な把握を試みた。その結果、同地域では行政側のリソースの不足により、まず事故関連データの収集・分析が困難な状況にあり、有効な安全対策が講じられていないことが明らかにされた。しかし、その一方で、Honda Vietnam（ベトナム）、A.P. Honda（タイ）といった二輪メーカーが多様な関係者と協働し、安全運転の普及や安全教育を主導していることが確認された。

2020 年度は、上述のリソース不足を補う方法として、ドローン空撮と AI 解析を用いたモーションパターンラーニングに基づくコリジョン・リスク分析を実施し、AI との共創による事故実態把握手法の有効性を確認した。加えてベトナムでの二輪車メーカーによる政府・自治体・地域コミュニティとの連携を通じた安全教育効果および社会的インパクト発現構造を検証した。そして、行政ではなく、民間が主体となり、多様な関係者の共創という従来とは異なる関係性の下、安全向上のための知識・技能を向上させ、未来を担う新たな世代の交通モラルの構築を進める、交通安全文化共創モデルすなわち Honda V モデルの提案を行った。

◎土井健司	(IATSS 会員／大阪大学)	猪井博登*	(富山大学)
上條俊介	(IATSS 会員／東京大学)	紀伊雅敦*	(香川大学)
北村友人	(IATSS 会員／東京大学)	山口直範*	(大阪国際大学)
関根太郎	(IATSS 会員／日本大学)	葉 健人*	(大阪大学)
高橋正也	(IATSS 会員／労働安全衛生総合研究所)	Hsin-Li Chang*	(National Chiao Tung University)
馬奈木俊介	(IATSS 会員／九州大学)	Nicolas Saunier*	(Polytechnique Montreal)
吉田長裕	(IATSS 会員／大阪市立大学)	Sippakorn Khaimook*	(大阪大学)
井上勇一*	(IATSS 顧問)	Yi-Shih Chung*	(National Chiao Tung University)
長谷川彰*	(IATSS 顧問／本田技研工業(株))	Yu-Chin Chiou*	(National Chiao Tung University)
長谷川孝明*	(IATSS 顧問／埼玉大学)	飯田 剛**	(本田技研工業(株))
福田 敦*	(IATSS 顧問／日本大学)	太田洋平**	(本田技研工業(株))
稲垣具志*	(中央大学)	周 純甄**	(大阪大学)

GRATS (Global Research Alliance on Traffic and Safety)

本プロジェクトは2016年から3カ年行われた創50プロジェクトIの発展的な調査研究活動として、2019年から着手された。主たる目標は、交通文化観点で国際比較調査を実施するとともに、国内外の研究者や研究機関・国際機関と連携することにより、先進的な交通政策を討議・提案するための共通のプラットフォームを構築することである。

組織構成は、全体会議の他、国際的な比較研究を中心とした研究部会、ならびに、各国との情報交流を目的とした交流部会がある。2020年度、研究部会では、各国の交通安全意識調査や統計データを基に各国の交通死亡事故率と特性を分析することによ

り、事故発生の因果構造モデル案を作成した。また、交流部会では、交通安全政策における国や国際機関の機能や活動実績を分類するとともに、交通安全の共通ビジョンと具体的政策との関係を示す概念モデルを提示した。同時に、国際協力機構（JICA）等の内外の機関との連携活動を行うことになった。全体会議においては、これら両部会の成果を基に今後の活動方針について検討を行った。

なお、GRATS活動の報告と当学会の活動方針に関する討議が、国際フォーラムGIFTSのワークショップの場で行われた（2020年11月27日リモート開催）。

【全体会議】

◎森本章倫	(IATSS 会員／早稲田大学)
中村英樹	(IATSS 会員／名古屋大学)
北村友人	(IATSS 会員／東京大学)
鈴木弘司	(IATSS 会員／名古屋工業大学)
土井健司	(IATSS 会員／大阪大学)
中村文彦	(IATSS 会員／横浜国立大学)
吉田長裕	(IATSS 会員／大阪市立大学)
岸井隆幸*	(IATSS 理事／日本大学)
井上勇一*	(IATSS 顧問)
橋本鋼太郎*	(IATSS 顧問／(一財)首都高速道路技術センター)
福田 敦*	(IATSS 顧問／日本大学)
長田哲平*	(宇都宮大学)
康 楠*	(南京工業大学)
北野尚宏*	(早稲田大学)
小泉幸弘*	((独)国際協力機構)
小園智寛*	((独)国際協力機構)
小柳桂泉*	((独)国際協力機構)
坂野成俊*	((株)富士通総研)
塩見康博*	(立命館大学)
鈴木一史*	(群馬工業高等専門学校)
鳥海 梓*	(東京大学)
濱田 禎*	(国土交通省)
米谷祐輝*	(内閣府)
吉田 綾**	((独)国際協力機構)

【交流部会】

森本章倫	(部会長／IATSS 会員／早稲田大学)
中村文彦	(IATSS 会員／横浜国立大学)
吉田長裕	(IATSS 会員／大阪市立大学)
長田哲平*	(宇都宮大学)
北野尚宏*	(早稲田大学)
小泉幸弘*	((独)国際協力機構)
小園智寛*	((独)国際協力機構)
小柳桂泉*	((独)国際協力機構)
坂野成俊*	((株)富士通総研)
米谷祐輝*	(内閣府)
吉田 綾**	((独)国際協力機構)

【研究部会】

中村英樹	(部会長／IATSS 会員／名古屋大学)
鈴木弘司	(IATSS 会員／名古屋工業大学)
井上勇一*	(IATSS 顧問)
橋本鋼太郎*	(IATSS 顧問／(一財)首都高速道路技術センター)
康 楠*	(南京工業大学)
鳥海 梓*	(東京大学)
塩見康博*	(立命館大学)
鈴木一史*	(群馬工業高等専門学校)
Ghassan Abu-Lebdeh*	(American University of Sharjah)
Mohamed Shawky Ahmed*	(Ain Shams University)
Wael K. M. Alhajyaseen*	(Qatar University)
Nicola Christie*	(University College London)
Lorenzo Mussone*	(Politecnico di Milano)
Keshuang Tang*	(Tongji University)
Babak Mehran*	(Manitoba University)
Wouter Van den Berghe*	(Vias institute)
Axel Wolferrmann*	(Hochschule Darmstadt)